

作庭実習「森をつくる」6

環境共生園について (1)

岩村 伸一¹⁾

Seminar in Garden Design “To Create a Forest” 6 On Kyoseien Garden (1)

Shinichi IWAMURA

抄 録：京都教育大学の美術科で開講されている『作庭実習』は、作庭を通して森をつくるということをテーマにしています。参加者は体を使って空間を変えることに取り組みます。2006 年度も附属環境教育実践センターの環境共生園をその舞台としました。ここでは、共生園の造園を年度を追って報告し、環境共生園の沿革について述べています。

キーワード：庭，森，環境共生園，遊び，環境教育

「空き地」を憶えておられるでしょうか。長い間そのままにされている土地のことなのですが、最近ではあまり見かけなくなったように思います。あっても小さな区分に区切られており、持ち主がわかっていてすぐに住宅が建ってしまう。またはアスファルトで固められて駐車場のようになってしまう。たまに広い工場跡地のようなものがあったとしても、重機で均されフェンスが施されて、人が立ち入れないようになっている。そして間もあけず次の事業に転用されていきます。いや、こう言ってしまいますと、この話を聞いている人が皆、同じ記憶を持っていることを前提としているようで、気持ち悪いですね。少し我慢してください。ここでは私個人の思い出の中の空間の話から、報告をはじめようと思います。

私は 1952 年生まれ、現在 54 歳。高知市街の北のはずれ、国鉄高知駅の「裏」と呼ばれるあたりで育ちました。戦争が終わりいくらか経って、やっと地域の活動も再開しはじめたところ、そんな地方都市の周辺部であります。駅の北側に残っていた蓮田を蒸気機関車の石炭ガラを利用して埋め立て開発されたささやかな地面。そこに父と母はそれぞれの思いと再生への希望を託して住み始めます。今に比べますと物質的には貧しいものの、それなりの充実が感じられる時代であったと思います。駅から北に向かう砂利道を少し行けば、建物はまばらになって空き地が連なり、それもすぐに直線的なセメントの縁取り線で途切れます。この線のこっちとそっ

1) 京都教育大学

ちの間に大きな段差のようなものがあることは、子どもにも感じられました。向こう側には、やわらかな曲線をともなった昔ながらの田園風景が広がっています。そこは、平野を北西から流れてくる久万川の河口域にあたる低地で、ひょうたん川と呼ばれる小川がうねって注ぎ込んでいる、水があふれたのどかな景色が展開していました。この向こう側が子どもたちにとって魅惑のスペースであったことは言うまでもありません。毎日、網とバケツを持って熱中して通いました。しかし一度崩れたバランスはそこで留まりません。風に揺らいで盛り上がるように光を反射していた透明な水は、白濁した生活用水に置き換えられ、そこに感じられた自然は、物の豊かさを引き換えにして、瞬く間に後退して行ったのです。

その頃の空き地は「訳のわからん」空間であったように思えます。あちこちの工事で残った土なのでしょう、それをトラックで何台も何台も、そこいらに盛り上げてあります。大きな土管がいくつも転がしてあります。ときには処理に困った廃物が捨ててあったりもする。それらが放置され、季節がすぎて、雑草に覆われています。おそらく当時、どこにでも見られる風景であったのだと思います。当然、私たちが放っておくわけがありません。日々の活動の中心点、子どもの遊びの場になりました。残土のデコボコ山や土管のトンネルを走り回るのは勿論、ひとりでボンヤリ過ごす大切な場所でもある。これらのドキドキやワクワクに彩られた様々な出来事を思い起こすたびに、昼下がりの光の中で荒れはてた印象を与える眩しい広がり、その空き地の光景に行きあたります。子どもの時間の支えであり、子どもとしての日常の背景であったところ。都市でも田園でもない、人工とも自然とも呼びがたい境目。ひどく人間くさい場所であったとも思い返されます。

京都教育大学附属環境教育実践センター（環境センター）南側の作業現場の、土を盛り上げた小高い丘の上で、片手に持ったスコップで、クヌギのドングリから芽を出した苗を植えています。これが根付いて一人前の木になるにはまだ数年はかかるだろうけれど、向こうに見えている5年程前に植えた苗は、いくつか、しっかりとした樹木の茂みになって、そこで作業している者を見え隠れさせている。ちょっと手を休め、作庭実習のメンバーがグループに分かれてそれぞれの仕事を進めているのを眺めました。見様によっては、「森」での作業と呼べなくもない感じです。この辺りにも、なんとなく、ひとつの雰囲気みたいなものが出てきはじめたのかなと思います。ほんの少しずつの作業を積み重ねて、数年かかってこんな形になってきました。これならここに「共生園」などと、名前を付けても何とかなるでしょう。

この場所に森をつくろうという案が持ち出されたのは、1998年の秋であったと思います。環境センター発行の『環境教育研究年報』をたどりますと、1999年度末に発行された年報第8号のセンター事業報告から、活動内容のひとつに「環境共生実習園（仮称）の整備」と記されています。環境センターの南側に隣接する宿舎が近い将来取り壊される予定だが、その跡地をどういうふうを活用したらよいかということから話ははじまりました。私も参加していたのですが、センターの教員を中心にして話し合った結果、附属学校・園も含めた大学全体の環境教育の実践の場となる「森」をつくろうということになりました。そのためには計画を立て、企画書を企画委員会と会計課あてに提出する必要があります。その年の11月末から造園予定現場を測量し、実測図、想定図、工事計画図等を大慌てで作成したのを憶えています。その年度



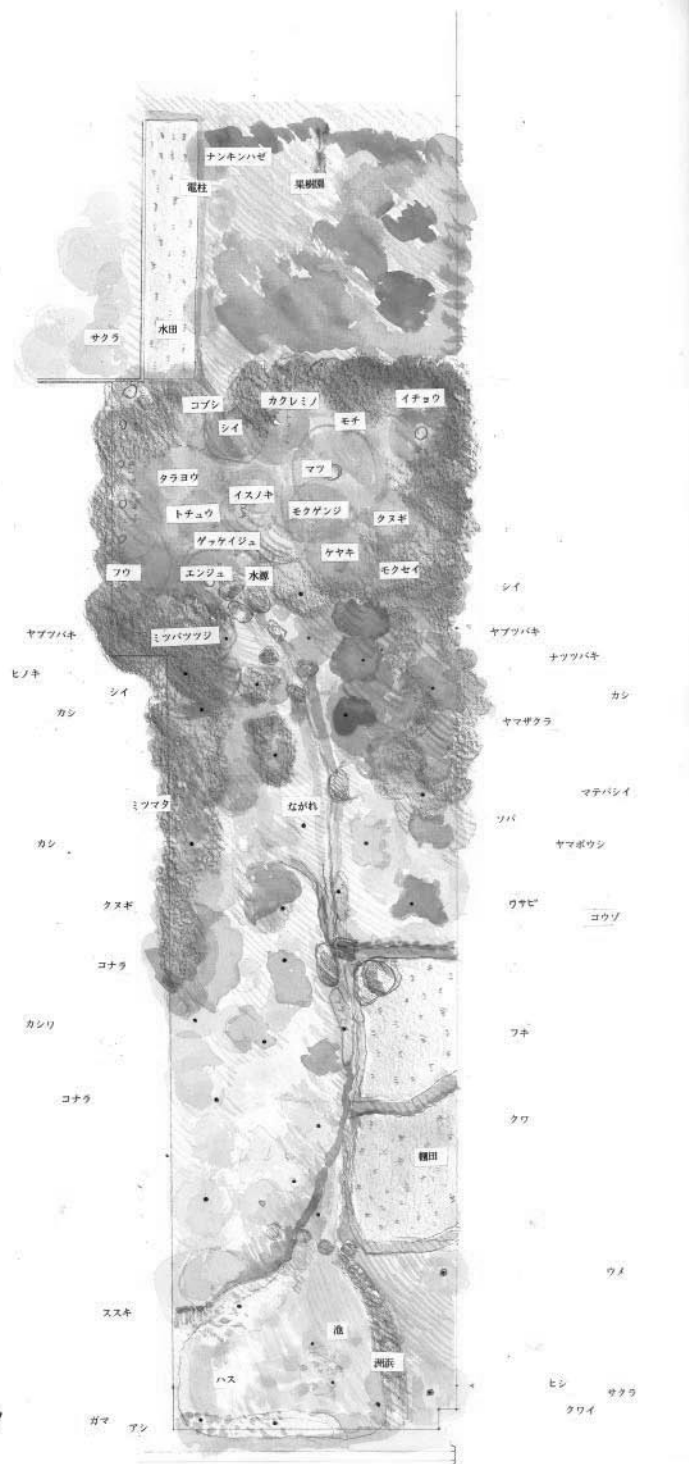
末の1999年3月6日土曜日に、センターで、『環境共生園をキーステーションにして—環境教育を学習から日常活動へ—』と題されたシンポジウムが開催されています。私もそのプラン作りに関わったこともあって、報告者に名を連ねていました。

このシンポジウムを記録した報告書『環境教育シンポジウム報告：環境共生園をキーステーションにして』（1999.3.31 発行）があります。いまだ成立していない、実は具体的イメージすら共有できていない、構想段階の「共生園」に関するシンポジウムであった訳です。少しずつではあっても工事が進んできた今、読み返してみますとなかなか興味深い。当然のことではありますが、参加した人のそれぞれの立場を背景にして、報告や意見の交換が行われています。当時、環境センター長であった坂口慶治氏はその挨拶のなかで「…環境教育というのは、そうした産業教育、あるいは自然理解教育というものだけでは済まされるものではないわけで、より根本的には人間社会と環境との関係を正しく認識させ、自然と人間との循環的な共生関係を創出していけるような能力を子供たちに身に付けさせていくことでなければならないと思います。それには、人間と社会との共生関係を歴史的に再確認できるような施設が必要となります。」(1)と述べて、環境センターに『環境共生実習園（仮称）』を設営し研究を進める旨を発表しています。あわせて「…人間がつくり出した共生世界、あるいは文化景観そのものであって、環境文化と呼んでよいものと考えています。そうした環境文化を体験できるコーナーというのがこの施設の主眼…」(2)であるとして、炭焼きや和紙作りの授業をこの実習園で展開すると、社会科学の観点から思いをひろげておられます。また、当日コメンテーターとして参加された二代目センター長の藤田哲雄氏はそのまとめのなかで、「…ビオトープあるいは人工自然林はやはり人工的な自然のひとつであり…自然の生態系、非常にダイナミックな生態系をそのままこれらにかえるということはできない…ビオトープそのものを自然の生態系とイコールにしてしまうというようなことがないように先生の方が気をつけていく必要があります。」(3) 加えて「…心配するのは非常にスケールの小さな自然林の中でそんな施設をつくって本当に学習した場合に自然の生態系そのものが維持できるのかということです。」(4)と理科教育を進めてこられた立場から意見を述べ、さいごは「…いずれにしてもこういう環境共生園というものがこのセンターの一角にできて、そしてその共生園を幼、小、中、高、大の我々が学習の中で活用していけるということは、非常に大きな夢を与えてくれるものだと非常にうれしく思っておりますので、ぜひこれを実現していただいて、そして先生方が話されたようなことが一つ一つ実現していくようにしていただけたら非常にありがたい…」(5)と結んでおられます。

会場ではこれらの他にも、ビオトープの制作とメンテナンスに関する話、共生園での具体的な学習カリキュラムの話、また、附属学校・園がここをどう利用していくのかといった話が重ねられています。何度も言いますが、そこでの話題の焦点である共生園は、その時はできていない。予定地には住宅が立ち並び、人が住んでいる。架空の共生園をめぐる環境教育の展開が論じられている訳です。その中であって、私は内心困っておりました。

私の『森のプランについて』と題された報告は、私に可能なこと一庭をつくるというところからのものでありました。報告の視覚的の手がかりとして『森の想定図』という小さな図面を示しながら、「…この森をつくるにあたっては、参加するみんなが共通のイメージ（設計図ではない）を持ってかわる。ゆっくりと作業をすすめ、よく見て感じ、そこから次を決めていくという作庭の方法」(6)を提案し、「みんなで作ってみませんか。ひとつの森（街の中では本当に小さな緑ですが）をめざして作業してみませんか。そしてそこにできてくるもの、そこでおきる事柄を楽しんでみませんか。」(7)と呼びかけています。この架空の森を実際の森に置き換えること、形のあるものとしてつくり上げることは大変なことです。大きな力を必要とします。そのことが強く感じられたのでしょう、私はその会場で「みんなで、少しずつ、ゆっくりと」と何度も述べることになりました。

結果から言いますと、この想定図は重要であったのだと思います。この図のもとになるプランは、環境センターで最初に話し合ったとき坂口氏から示された、古い京都伏見の景観を再生しようという共生実習園プランと、私が作庭家として参加した造園現場や、勤めていた高等学校の環境造形という授業で生徒たちと取り組んだことのある、山裾の雑木林を念頭に里山プランを重ね合わせたものでした。南北に長い、しかも南に向けて少しずつ下がっていく予定地にあわせて、北側のセンター敷地内の藪の中に水の流れ出す水源を、南端にその水が流れ込む沼地や池を持つ水の流れを考えました。そしてその川の上流、中流、下流に沿って、原始景観、耕地景観、水辺景観を配し、それらに見合う植生を展開しよう…。頭の中にあるこれらを、紙の上の小さな、実測による予定地の枠の中に描き込んだだけのものでした。時間的余裕がなく筆の勢いで描いたことを思い出します。が、この図面があることで、シンポジウムを通じて、まがりなりにも都市の中の小さな森というイメージが共有できたのですし、その後この場所で造園作業をはじめるとあっても、参加者に対して説明するのにこの図面を使いました。実際、上流部分の石組みを行った際によりどころとしたのは、この図からの気分でもありました。



森の想定図 環境共生実習園 (仮称) プラン

環境共生園の造園には、1999年10月28日に着手しました。美術科の専門科目であった『インスタレーション研究』(2000年度より『作庭実習』と名称変更。同時に得意分野作りの環境パッケージを構成する科目となりました。)の授業内容としてこの場所で作業をしています。ただしこの時点では、予定地のほとんどははまだ宿舎であり、手をつけられる場所は環境センター南側のフェンスから更に南に8mほど、そこにあった空き家を取り壊して整地したところだけでした。このフェンスの北側は、樹木見本園として既に何種類かの樹木が十数年にわたって放置されており、木々は自然な形に枝を伸ばしています。この部分を共生園の奥山の森として整備することが、この年の主な作業内容となりました。共生実習園予定地の測量をした1998年11月20日より記入をはじめた『森の作業日誌』を見返しますと、受講生9名、非常勤講師古川三盛氏、それに岩村で森づくりをスタートさせています。「実生木や下草を鋸、鋏でとりはらいながら少しずつ入る。ヤブ蚊多く、はじめ難航。少し入ると中は思ったより実生木は少ない。」と記されています。

この年は全部で4回この森で作業していますが、そのほとんどを2本の木の移植に費やしています。樹木見本園の東側にあった比較的大きなカイヅカイブキと、中央部分で暴れているかのような姿のマサキです。これらは庭木として導入されたもので、この場所を山奥の森と想定した場合、あまり生えていない種類だろうということで、フェンスの南側、今後展開していく里山の方に移動させることにしました。この見本園の地面は思いのほか固く、しかも礫の層や粘土の層があって、根の周りや定植場所を掘るのに素人ではかなりの苦勞をします。しかもその根を掘り起こし、荒縄で鉢巻をして、移植するという一連の植木屋仕事です。林の中での木の移動は棒とロープを使って人力で行わざるを得ません。掘り出し、鉢巻をした木は予想以上に重く、一本の木に全員が力をあわせて移動にあたりました。定植が完了し、水をやって周囲の地面を均した後、皆でしゃがみこんで周りを見上げたことが印象に残っています。

フェンス南側の住宅跡地には、この年、作業としては木を2本植えただけでしたが、この先ここで作庭で使うことになる、古い寺の改築にもなって不要になった庭石を2トトラック3台ほど譲り受け、積み上げました。また、附属養護学校の施設工事の残土を引き受けています。庭では使いづらい、粘土の多い礫交じりの土でしたが、この場に広げて陽に当てておくことにしました。ほんの少しずつの足取りであり、手探りのような状態ではありますが、なんとか造園作業はスタートしたのだと思います。



2000年度はフェンス南側の住宅跡地での作業に集中しました。授業『作庭実習』を通して10回この場所で作業を行っています。狭い土地なので、すぐに整地作業は終わるだろうと思っていたのですが、はびこっていた雑草やイバラを払った地面の中から、次々と異物が出てきます。自動車のタイヤ、自転車、大きなオートバイまで、それに金属、ガラス、プラスチック等の大量の生活ゴミ、はては巨大なコンクリートの塊が数個（これらはチェーンブロックを使って引き抜きました。）と折れたコンクリート製の電柱…。なんともひどい有様です。人力ですからすべては除去できませんでしたが、これらを山積みにして会計課を通し業者に引き取ってもらいました。前年広げておいた養護学校からの土が早速役立ちました。廃棄物を取り出し低くなったところへこの土を入れて、再度地形を整えました。この年の目標であった小流れ上流景観の作庭に取り掛かれたのは12月も後半になってからでした。『森の想定図』の気分と谷川上流のイメージをもとに石組みを施し、真砂土（28tの土を使っています。）を加えて、ゆるやかな地形を作り出しています。この作庭の詳細は、環境教育年報第11号の『作庭実習「森をつくる」1 石を据える』で報告してあります。参照してください。

その他、この年の事項で特筆すべきは、不登校の生徒たちの『ふれあい教室』のメンバーによって、この場所へ42本の苗木を定植してもらったことと、実習参加者全員で古川氏の作庭現場である瀬戸内寂聴氏宅へ出向き、そこで不要となるマツヤカシ、コナラを十数本掘り起こし、いただいてこの共生園に移植したことだと思います。（植物に関しては次回の報告で詳しくふれるつもりです。）

この年度の作業最終日、2001年2月4日の日記には、「この半年間でずいぶん作業はすすむようになってきている。技術がどうのというよりも、気持ちの入った作業のように思う。メンバーそれぞれが全体をイメージできるようになって、作業に勢いのようなものが感じられる。このメンバーでの作業が今日で終わるのは残念な気がする。」と書いてあります。夕刻、予定した仕事を終え一息ついたとき、そこにはきれいな空間がありました。いつまでも眺めていたのです。

その後しばらく環境共生園には、何度か草刈等には行ったのですが、工事の手を加えていません。2001年度の作庭実習は舞台を附属図書館前の森（環境教育年報第11号の『作庭実習「森をつくる」2 庭と時間』参照）にして授業を展開しました。2002年度、2003年度はE棟北の森（環境教育年報第12号の『作庭実習「森をつくる」3 庭の自然について (1)』同第13号の『作庭実習「森をつくる」4 庭の自然について (2)』参照）でした。作庭実習が環境共生園に帰ってきたのは、2004年度でありました。

その年の4月の段階で、それまであった公務員宿舎は解体撤去され、跡地は真砂土が入られ均されて更地となっています。まだ草ひとつ生えていないその場に立って茫然としました。いざ建物がなくなると、その場所は本当に広がった。まるでグラウンドのようでした。ここにどう手をつけたらいいのやら…。これまでのように授業という限られた時間と、不馴れな受講生を中心にした人力でこの場に向かうのは、気の遠くなるような試みに思えました。中でも一番の問題点は土でした。2000年度に仕上げた部分とこの更地の表面にはかなりの高低がありました。この場所を山裾のなだらかな地形にし、ゆるやかな野筋を作り上げるには、どれだけの土の量を必要とするでしょう。数年前に一度測量したはずなのに再度測りなおしたりしていま



す。面積に高さをかける単純な計算なのでしょうが、いくら計算してもはっきりとした数値は出ません。600 から 1000 m^3 、重さにすれば 1000 から 1600t でしょうか。どちらにしてもそんな量の真砂土を購入することは不可能だと思います。建築業者に残土の利用についてもたずねたのですが、法律が変わり、廃棄証明等の手続きの問題もあって期待できないようでした。これまでも研究費や教育研究改革・改善プロジェクト経費（学長裁量経費）をやりくりして、なんとか工事を進めてきました。が、この広さに対しては、私ひとりのやりくりでは桁が違いすぎます。困ってしまいました。しかしここでやめる手はありません。せっかく面白くなってきたところです。何か手立てはあるはずです。夏から授業の始まる 10 月にかけて、環境センターや会計課と何度か話をしています。

援軍は施設課から来ました。「附属京都中学校で施設工事を行うが、その工事が出る不用土の処理を学内で考えている。」というものでした。ボーリング調査で出た土のサンプルを見せてもらい説明を受けて、共生園の現場で引き受けると返事をしました。そのすぐ後、今度は附属高等学校メディア棟北側駐輪場工事です。跳んで行って山積みになっている不用土に登りました。附属高等学校からは 12 月はじめに土が移されています。附属京都中学校からは翌 1 月後半に来ました。それらはダンプカーで何台も下ろされブルドーザーで敷き均しされました。機械の作業ですから、直線的で硬いのは仕方のないところですが、これで共生園の野筋の土台としては十分な量の土がやってきた訳です。

2004 年度は 8 回この場所で作業を行っています。2000 年度につくった上流部の庭を少しずつ南の平らな地面へ広げていきました。相変わらず、授業という限られた時間と、受講生を中心にしたささやかな人力での仕事です。この、「少しずつゆっくりと」が作庭実習の、また共生園での制作の要点であります。それは今も変わりません。毎回、トラックの荷台から下ろされたままの真砂土の山を、スコップと一輪車を使って、ゆるやかな地形の部分に継ぎ足していきます。結局、この年度は真砂土運びばかりやったように思えます。その使用量は、我々が 30、環境センターから 72 の計 102 m^3 になりました。はじめのうちは時間のかかった土の移動も、体が作業に慣れるにつれ、回を重ねるうちに順調に進むようになりました。庭の部分が南に広

がるにつれ、川をあらわす兩岸の石組みも南へのびて行きます。



ここでひとつの疑問が浮かびました。このままこの川がまっすぐグランド(?)を突ききって南端まで行くことが可能だろうかというものです。最初の想定図ではそうになっていたはずですが、実際にこの敷地の南北の長さを見ますと、その計画に首を傾げてしまいます。しかもこのゆるやかな勾配では、自然な流れどころか排水溝をつくる以外手はないでしょう。あまりにも単調で不自然に思える景色です。この南北の長さに合わせて長い川をつくると、かえって長さを強調し、幅の狭さを見せることになります。このままでは堅苦しい造園作業に陥りかねない。どうしたものかと考えていました。

小さな声でささやかれたかのような「中央部分に低地または池を持ってきては…」という古川氏の提案に飛びついています。その時、現場にあった石の中で一番大きなものを、流れの正面に据えました。それに当たって水は東の方、道路側に少しだけ向きを変えるというシナリオです。この敷地の中央東よりを掘り下げ低地にし、その余った土でその西側、消防学校寄りに丘をつくる。そうすることで道から消防学校側を見たときの視線を受け止めるような地形になり、眺める者には実際の幅よりも広く感じられるはずで。同時に、より自由な作庭が期待できるでしょう。

作庭の現場ではこのような予定の変更はよくあることです。多くの場合、設計図のようなものを持ちません。もし持っていたとしても、机の上で考えられる条件はあくまでも大枠だけです。そこで期待するような材料がいつも手に入るとは限らないのです。制作の場で実際に「もの」に向き合わなくてはわからない事柄がたくさんあります。雨、風、光、土の質などの自然条件、それに予定地周囲の景色や施主の思いなども、庭づくりに大きくかかわります。それらからの要請を取り入れなくては、自由でやわらかな作庭はできません。これは絵を描く場合も同じことです。下絵などの構想を持っていたとしても、実際の進行に合わせて、絵具や紙といった材料からの要請や目の前で展開する色や形からの判断を加えていかなければ、絵は楽しくない。当初のこうしたいという設計図のみに頼ったのでは小さく縮こまった絵になってしまいます。この時点で計画は変更されました。計画段階のさまざまな狙いを寄せ集め直線的配列につ

くり上げられていた想定図は、いったん解体され、その場での判断を重視する作庭的、美術的な方法によって組み直されることになりました。

環境センターホームページで平成 16 年度事業報告を見ますと、「環境共生園の整備の推進」の項に、次のコメントが記されています。また、この年度からそれまで付いていた環境共生園の後ろの（仮称）が除かれています。「…豊かな自然との触れ合いの機会の確保、野外での生活体験・勤労体験学習等、環境教育に関する体系的研究・教育実践指導・普及の要望実現のため、こうした木本植物の栽植用地や昆虫等の小動物の生育環境としての整備を行い、京都伏見における昔ながらの里山景観としての自然環境に近い環境を造りあげ、それらを地域に根ざした自然環境として活用したいと考え、「環境共生園」の整備を要求してきました。平成 16 年度より、本学宿舎跡地を環境教育実践センターの敷地とあわせて「環境共生園」として整備する作業が「作庭実習」という授業の中で開始されています。」

2005 年度の共生園での作庭実習は 9 回。2004 年度に敷地内に取り入れられ平板に均されている大量の土を、これまでつくり上げてきた庭の地形に合わせ、起伏を持った野筋にすることに多くの力を使っています。その詳細は、環境教育年報第 15 号の『作庭実習「森をつくる」5 環境共生園 2005』を見てください。そこでは、その年の作業の実際を作業者の視点から日時を追って報告してあります。この大量の土砂に、限られた時間と学生の力だけで対処するには、無理があります。いくらやっても変化しない土の広がりや、毎回前にしたのでは作業への気持ちも萎えてしまう。低地を掘り丘に積み上げる仕事は重機に任せることにしました。ショベルカーとトラックとひとりの作業員が二日で、土を移動し粗方の整地まで完了してしまいました。しかし、機械での仕事はどうしても直線的で粗い仕上げになってしまいます。その部分に人の手を加え、やわらかい曲線にしていくことが、この年度苦心した点でありました。その結果、この共生園は大きく姿を変えます。全体としてひとつのまとまりのようなものが、やっと感じられるようになりました。

2006 年の春、桜が散る頃、この場所には大きな池ができていました。降った雨は地表の起伏を伝い、人工の流れを伝って、低地に集まりました。はじめのうちは地中に吸い込まれていたのですが、細かい土の粒子が底を覆ったので、水が溜まるようになりました。穴を掘ったら水が溜まるのは当たり前のこと。当初の坂口氏の共生実習園計画では、井戸を掘り川に水を流す予定（現在は予算や管理のこともあって、涸れ流れとして作成しています。）であった訳です。森の想定図にも池を描き込んでありました。しかしこんなに簡単に池になるとは思っていません。少し早すぎます。まだ庭は仕上がっていません。池にするとしても、その前に洲浜や護岸の造作に取り組みたいという想いがありました。また、蚊の発生も気になるころでした。5 月に入って、ポンプで水を抜き、池の底に会所を設置する排水工事を行っています。同時に理学科坂東忠司氏による調査も実施されました。相当数のヤゴや大量のミジンコの棲息が確認されています。将来、造作が完了して池になったとしても、自然の生態に期待を持つことができました。



2006年度はこれを書いている12月末までに7回の作業です。池の周囲の作庭を中心としています。道から池に向かって、左の方向に人里があることを暗示する、棚田や護岸などの人為的な工作を進めています。特に、丘の土が池に崩れ込むのを防ぐ、水が溜まったときには護岸となる石垣の制作がこの年の中心課題でした。この石垣に関しては、安田孝一君の報告が適切に伝えるだろうと思います。彼は2001年度の作庭実習受講者で、現在は京都市立中学校の美術科非常勤講師です。その空いた時間に、作庭実習の作業補助を依頼しました。少し長いですが、安田報告の全文です。

「作業はまず、池のふちの西側の傾斜の余分な土を高さ50cm位まで手掘りを取り除く事からはじめられた。10月中旬とはいえ日中はまだ暑く、作業にあたった者たちは、Tシャツ姿でツルハシやスコップを振るっていた。その日のうちに長さ6～7mほど岸が切り崩された。

地面を掘り終えるとさっそく、数人で試しに右端に石を積んでみた。全くの手探りだったので、石の向きや並べ方に何らかのセオリーがありそうな感じはしたが、結局よくわからなかった。材料の石は、敷地の北側に集められていたものの中から30cm～50cm程度の大きさのものを選び、この前の作業時から数回に渡って手押しの一輪車で池の中にどんどん運び込んだ。

石垣の制作は、古川さんが作業に参加した日からにわかに本格化した。何となくで積んであった石もほぼそのままに、その続きに左に向かって石垣を延長していった。はじめは、参加者の多くが何をしているのかすらよく分からないようだったが、次々出される古川さんの指示から、石垣を作るための方法がすこしずつ分かってきた。以下、それを簡単に述べる。

基礎となる石は、安定が良いようになるべく大きなものを選び、掘り下げ気味に据える。そこでまず考えなくてはならないのが、石をどのような向きで使うかだ。石垣の表面には、なるべく広くて平らな面を持ってきたい。石の後ろ側に隙間ができて、土を突き込んで固めてしまえばよく、そうすることで石垣の面積あたりの石の数も少なくてすむ。また、平らな面を合わせていくことで、きれいに面のそろった石垣を作ることができる。(これを、ノヅラを合わせる、という。)しかし、それだけでは石垣の基礎の要件を満たしていない。さらに、その上に石を積む事を考慮に入れなくてはならないからだ。そのためには石の上面が、奥に向かって下がっていくような面でなくてはならない。上に積んだ石が手前にずれ落ちる事なく、背後の土砂の流出を食い止める必要があるからだ。このことは、さらに上に石を積む場合の二段目、三段目にもいえる。

その次にくる石は上記のような向きで、かつ、なるべく隙間のないように据えていきたいので、隣りの石と接する部分の形が合いそうな石に見当をつけ、角度や位置をいろいろ試しながら次々に据えていく。

2, 3 個大きな石が並んで据われれば、その上に石を積んでいく事ができる。据えた石の背面と切り崩された崖の間には、その石の高さまで棒などを使って土をしっかりと突き込んでおく。その上に、形が合いそうな石を、ノヅラが合うように、場合によっては小石を挟みながら角度を調整して、積んでいく。石を積んだら、後ろの隙間に土を入れて安定させる。表になる面の選び方は、基礎の石と同じだ。石どうしの形が微妙に合わないときは、石ノミを使って余計な部分をはつたりして形を合わせるときもある。

ノヅラ（石垣の前面）とテンバ（石垣の上面）がきれいに揃えば立派な石垣ができる。達人ともなれば、いちいち石を選ばなくてもこの複雑なパズルをやっつけてのけるそうだが、われわれではそうは簡単に行かない。表面を不揃いに仕上げた石垣は「ノヅラ崩し」と呼ばれ、なかでも土留めとしての機能を重視したものは「百姓積み」などと呼ばれたりする。いま作っている石垣は高さ 40cm ほど、石を 2～3 個積み上げたものだが、これはなんと呼ぶのだろうか…。

上述のような方法で、古川さんの指導のもと、毎回 4～5 人くらいのメンバーで手分けして石垣の制作を進めた。それ以外の日は池の岸を掘る作業を行い、あわせて 10m ほどの岸を切り崩した。ツルハシやスコップも使った事のなかったメンバーがほとんどだ。石ひとつ動かすにも、最初はその重さに戸惑ったと思うが、協力してやってみればなんとかなる。作業にも少しずつ慣れてきているようだ。

たとえば石の向きの決め方ひとつとっても、それぞれの作業が様々な要素（作業者の意図やその能力、そもそも目の前にあるものの性質、状態…）のからみあったものだというところをこの報告を書いていたらためて感じる。しかし、文章を何行も使って説明しなければ伝わらないことも、動作としては、実は、石のひと転がしだ。そのひと転がしが難しいのだが、まずは体を使って実際にやってみながら考える。それが意外と近道なようだ。

2006 年末までに長さ 6～7m の石垣ができあがった。12 月最後の作業日には、石垣ができ



ている部分とその上の地形をなだらかにつなげる作業も並行して進められた。その作業によって、それまで石を積んであるだけだったものが、急に土留めとしての石垣らしく見えるようになった。

作業終了後、できているものをぼんやり眺めた。それぞれの部分がさまざまな様相を呈している。最初に積んだ右端はなんとなくおぼつかなく、強度も少し心配だ。左側の数mは石も立派なものが選ばれ、組み合わせの精度も高い。ひとつの石を基点として作業を加え、その結果をさらなる作業の基点として次々と作業が重ねられていった。それらがひとつつらなりの「石垣」としてそこにある。作業を経験した今はそのことがよく見て取れる。

作業の途中、できかけの石垣の雨をあびた部分が、それだけでずいぶん落ち着いて見えることに気付いた。いまは真新しく見えるこの石垣も、数年のうちには周囲と馴染んで、居場所を見つけてくれるだろう。あたりを見回す。石垣だけではない。さまざまな人の作業と自然による変化が折り重なった空間が自分のまわりに広がっている。そのことが以前よりも増して感じられる気がする。」

環境共生園の一番高いところに立って周りを見まわすと、空き地で遊んでいたときの感覚がよみがえります。子どもときの日常の背景であった、あの眩しい光景が立ち上がってくるかのようです。この空き地で数人の仲間と、ゆっくりと時間を使いながら、庭を、森をつくってきました。石を据えたり木を植えたりして、その度に空間が変わるのを確かめながら、あるいはその時々判断を楽しみながら、ここまでできています。ここに立っていると、遊びに満足して風に吹かれている子どものような爽快感に満たされるようです。

本当に庭をつくっているのだろうかと思います。作庭家や庭職人の場合、職業として庭に関わります。当然、施主との関係の上に作業は成り立ちます。このような構図をもとに私たちの作庭を考えますと、たしかに授業としての枠付けがあり、また大学全体を施主と見なすことも可能でしょうが、結局のところ、仕事ではありえない。やはり私たちはひとりひとりの感覚を頼りにして、この場所と関わっているだけです。それだけでいつの間にか、ひとつの森であるかのような空気が私たちの周りを取り囲みはじめています。ここは我々の空間であり、ひとりひとりの「私の森」なのでした。子どもは遊びながら、その場所にひとつの意味を与えていきます。その都度その都度、新しい意味を組み立てる。だから何もなような空き地で遊ぶことができる。そこにはすべてのものがあるからです。私たちはこの場所に足を踏み入れる度に、この空間に新しい意味を与え、その都度、森を組み立て直してきたのです。私たちはこの空き地で遊んでいたのです。

これからもまだまだこの場での作庭は続いていくのですし、この場も森として成長していくのだと思います。しかし、このあたりで、計画段階の環境共生園に寄せられていた当初の期待、環境教育の実践に役立terるといふことの実現に向け、方策を探る時期にきているのではないかと思います。そのためには私たちだけではなくもっと多くの人が、この場所に関わらなければなりません。この環境共生園は、常に開かれた、すべてに通じる道を持つ、人々の往き来する場であればなりません。

子どもの遊びも、学びも、変わってきているといいます。それでも、そのように仕向けられ、

与えられた所では、遊ばない、学ばない。ひとりひとりの思いを持って、自分から分け入っていくことのできる場が必要です。ニュートラルな空間が成立してはなりません。この場所には、いつまでも「訳のわからん」空間であり続けて欲しいと願います。それを、「森」と呼んでいいのだと思います。



註

- (1) 『環境教育シンポジウム報告：環境共生園をキーステーションにして－環境教育を学習から日常活動へ－』（1999）京都教育大学附属環境教育実践センター p.1
- (2) 同上書 p.2
- (3) 同上書 pp.34-35
- (4) 同上書 p.35
- (5) 同上書 p.35
- (6) 同上書 「森のプランについて－簡単な報告と提案－」 p.4
- (7) 同上書 「森のプランについて－簡単な報告と提案－」 p.5